

た」のニュースが入り、「そんな筈はない」とお互い信じなかった。ところが、敵将が本部の歩哨線を突破し、我々の部隊兵と武器弾薬を即時渡せと言う。連隊長は、

「負けたとはいえ、日本帝国軍人である。派遣軍の命令無い限り渡すことは出来ない。若し不服ならここで貴殿の部隊と今から一戦をやる」

と力をいれ述べたところ、敵將校はすぐご帰っていったそうだ。これは共産軍であつたらしい。

駐留地の敵の状況に不穩の動きがあるので、連隊はこの街を撤退する。予想のように、背後から送り狼のような部隊が追尾してくる。常德作戦撤退と同じ繰り返しであつた。その時、落伍者二十五名程が敵に拉致されたらしい。この部隊は毛沢東の共産軍部隊（新四軍？）らしい。あの時、連隊長が毅然として、敵の申し入れを拒否しないで、兵や兵器を渡していたら、今頃は毛沢東の兵となっていたかも知れない。

以後、南京まで行軍、中国將兵や良民との交流や、不良中国兵の略奪など、敗軍の兵としていろいろ忘れ

られない経験をして、上海出帆は二十一年二月だが、何処の港に着くか不安の日々であつた。

四日目の朝、甲板より島々が見える、松の木がある。間違ひなく日本である。皆甲板上で抱き合つて泣いて喜んだ。顧みて三年三ヵ月になる。毎日夢見た祖国日本、九死に一生を得ての帰国、その感激は一生忘れられない。

二月十日、無事佐世保港に上陸、復員することが出来た。はじめに申した通り、三年余の中国戦線での体験の中、蔣主席の

「以德報怨の精神、慈悲にして寛大なる精神」が中国国民一人一人に脈々として伝わっている感を持つている。

## 初陣の常德作戦

三重県 浜口 敬治郎

私が久居の連隊に入隊したのは、昭和十七年の暮も

押し迫った十二月十日のことでした。

訓練の日もなく、慌しく連隊を十二月二十日、何処へ行くのかも分からぬままに、軍用列車で釜山、山海関經由で目的地に向いました。

着いたのは南京―中央兵站でした。そこで第百十六師団の歩兵第三百三十三連隊・第三大隊・第九中隊に配属になりました。その中隊で私の運命は決まったのです。

大きな作戦では常德作戦、衡陽作戦、芷江作戦に参加し、芷江作戦で左大腿部貫通銃創の負傷をしました。が、幸い生命を取り止めました。その他小さな作戦、討伐を数えたらきりがありません。良くぞ生きて帰ったとの感があります。

他の人が衡陽、芷江作戦について話をしますので、私は主として常德作戦についてお話ししましょう。

連隊本部は銅陵にあり、大隊本部は荻港におかれていました。

初年兵教育は勿論現地教育で、警備しながらの教育でした。最初の一カ月半は荻港で、後の一カ月は湖山

でした。

一期の検閲直後のことと思います。荻港対岸の観音廟分哨を第十一中隊が警備していたのですが、第九中隊と交替することになったのです。交替時の油断から風呂用の高黍ガラを通訳を通じ調達し、その苦力達に残飯を供しようとしたところパンパンと撃たれ、全員即死しました。苦力とと思っていたのが便衣隊達だったのです。炊事当番が死角にいたため、辛うじて脱出し本部に連絡したのです。本来なら敵前逃亡ですが、戦時中のこととて軍法会議にもかかりませんでした。

報告を受けて大隊をあげての討伐ですが、もはやもぬけの殻です。一面の麦畑で人っ子一人も見渡せません。この時つくづく思いました。中国大陸は広いということと、良民と便衣隊の区別がつかないということです。中支附近は新四軍の出没の激しい所で、その捕捉は容易ではなかったのです。

その後、通訳や炊事当番の手引きで分哨が全滅した話をちよくちよく聞きました。全く油断も隙もないということでした。

嵐兵団は、五月機動部隊に改編し、揚子江岸を確保し、ときどき附近の敵の掃討戦を実施し、私も参加しました。申し遅れましたが私は擲弾筒手です。

九月下旬になると中隊全体が何となくざわめいてきました。大きな作戦の前触れです。十月五日第二大隊は夜陰に乗り揚子江を遡航し始め、途中、九江地区で対空退避し、武漢地区に上陸しました。

十月中旬、漢口地区から西方に向かい機動を開始、米機の空爆を避け、主に夜間移動しました。二十日ごろ新口に到着、揚子江を夜陰に乗り渡河、揚子江南岸に進出した。われわれ兵隊にもこの作戦は常德城攻略であり容易なものでないことが察せられました。

常德は長沙と並んで、湖南省の要衝であり、未だ日本軍が一度も攻略したことのない所です。

行軍につぐ行軍で、靴傷、鞍傷の続出でしたが、士気は軒昂でした。約四百キロ近く行軍し、無傷の国民党直系軍との正面衝突も刻々と近づいてきました。

積吾口附近で緒戦を迎えたのです。敵は、積吾口前面の堤防をことごとく決壊し、一面の湖沼となり進路

はすべて水の下、堤防が唯一の進路だが、ここに敵は陣地を築き頑強に抵抗します。人工の湖沼地帯を民船で敵前渡河し、先兵中隊の第一中隊が翌十一月三日に積吾口を占領しました。

その後大いに悩まされたのは正規軍の抵抗とクリークの決壊でした。しかも民船を沈めるか隠してしまいます。それに常德城占領前後から米空軍の空からの攻撃です。

クリークを渡河するのにもたましてしていると、前方、側方のトーチカからチェッコの一斉射撃です。これには本当に苦勞しました。

積吾口から裴家土地を目指して進撃を開始した。伝家橋附近で敵は迫撃砲を主体に反撃したが、我が中隊は伝家橋南方台地を死守し連隊の渡河完了を待ち攻撃に転じ、四日未明敵を撃破し猛追撃を開始しました。

ここで迫撃砲のことに触れますが、着弾地が分からず、速射砲や機関銃より心理的に恐ろしい武器でした。敵にとっても擲弾筒は同じことで何処に落下するか分からず、野戦で擲弾筒の一斉射撃をやると敵は敗走し

たものです。

クリークー決壊し敵前渡河を繰り返しながら敵を南方に追いつめ、十一月五日余家台、十一月八日紅廟を占領しました。

幸い工兵隊も増強され、われわれも逐次渡河作戦になれてきたが、野戦よりも犠牲者の多いことは残念でした。

ひきつづき澧水の防禦線を突破、堤防上に進出、第一期の湿地内の作戦を終了し、陣家巷子へ集結しました。この作戦も水との戦いでクリークにはともかく悩まされ通しました。

いよいよ常德作戦です。

大隊は陣家巷子で師団直轄部隊となりました。我が中隊は先兵となり十一月十五日陣家巷子を出発、常德へ急進しました。十一月二十五日夢にまで見た常德城が視界にひらけてきました。

途中クリークを渡河、舟に定員以上の兵隊が乗り、軍旗ごと沈むという事故がありました。幸い軍旗は無事でした。

時、あたかも第百二十連隊（和爾部隊）が常德城西門を猛攻中でした。

常德城は城内、城壁、外堀をもつ永久陣地で、城壁にはペトン製トーチカが密集し、城門に敷設した障害物はトーチカの火力と相俟ち、とても近寄れなく思われ、市街地も突入して分かったことだが一軒一軒がトーチカのようになっていました。

これを護るは直系軍二個師団、加えるに米空軍の援護を受ける精鋭軍でした。

日本軍を包囲殲滅するため数個師団が北上中との噂が流れていました。

和爾部隊の西門攻撃は失敗に終わり、脇屋大隊が小西門の攻撃を行ったが、これも大隊長が戦死し失敗に帰りました。十一月二十三日から二十五日にかけてのことでした。

我が大隊は師団直轄を解かれ、連隊に復帰、常德城北方を迂回して地雷原地帯を突破しながら北門の北方二キロのところまで進出しました。二十六日の午後三時頃でした。

勇躍北門攻略の準備にかかったのが二十六日、日没前でした。クリークを決死隊の徴集した民船で渡り、城門北方の小部落に身を潜めました。その間、城門、城壁からの狙撃、城内からの迫撃砲の猛射がありました。中には地雷原を踏み負傷する兵もありました。

しかも、敵の集中砲火は間断なく続き、何時止むとも分かりません。我が軍の死傷者は続出するのみです。大隊長は涙をのみ、夜の北門攻略を断念し、後方の集結基地に反転し、態勢を整理しました。

大隊長の意見具申の結果、飛行機、火力により敵陣地および障害物を徹底的に制圧した後、攻撃をすることになった。

十一月二十七日は一日中北門攻略のため兵器の手入れや被服の修理でした。

友軍機の誤爆により、閨屋中尉以下数名が負傷後退したのは返す返すも残念でした。

第九中隊を右第一線、第十一中隊を左第一線とし、機関銃、歩兵砲の位置を定めて事前打ち合わせを行い、また砲兵隊、工兵隊と周到な協定を行いました。

二十八日払暁前に一斉に我が砲兵、銃火器の集中射撃が開始、敵の迫撃砲陣地およびトーチカを制圧した。特に独立山砲隊、工兵隊の活躍には思わず手を合わせた。私たちは満を持して突入の時期を待った。

二十八日朝、撤収した舟および工兵の架橋した板橋を渡り敵前渡河、北門の左右の対岸の堤防に辿り着いた。敵は我が軍が城内に突入してからも頑強に抵抗を続ける。トーチカ内部に火器を握ったまま戦死している兵も見受けられた。まだ火を吹くトーチカには死角から近づき手榴弾を投げ込んだこともある。

第十二中隊、第七中隊も城内に突入、城内の攻略、掃討戦に移った。

常德市内の家屋の側壁は煉瓦か土壁で、小銃やピストルの弾は貫通しない。一軒の家を占領すると銃床で壁に穴を明け手榴弾を投げ込む。

このようにして一軒一軒しらみつぶしに潰して行った。まだ市内に敵兵がひそんでいる。発見が一瞬遅れば生命がない。市街戦は薄氷を踏む思いか、緊張の極というか野戦では味わえない心境でした。

城内掃討戦五日間、彼我共に多大の損害を出しながら十二月三日払暁、沅江北岸堤防上において敵の降伏をみたのです。

十二月三日夕刻、連隊長・黒瀬大佐は市内の広場に将兵を集め入城式を行いました。

連隊は十二月五日夕、常德城を後にして反転、進撃してきた道を引き返し、一路漢口に向かったのです。

大隊は後衛部隊として敵の追撃を退けつつ反転、援護の大任にあたりました。

連隊本部は葛店に置き、第三大隊は華容鎮地区に駐留し、常德作戦は終わり、次期作戦に備え、着々と戦力の充実を図ったのです。

今でも一番有難く思うのは終始、郷土出身の人々と行動を共にできたことです。

## 常德、衡陽、芷江作戦従軍記

三重県 玉木 齋 吉

昭和十八年十二月三日、多大な損害を受け、激闘の末漸く奪取した常德も、敵大軍が包囲態勢を取る形勢になったので、僅か二日間の占領で直ちに反転を命じられた。上の人は兵隊の命をどう思っているんだと怒りを感じたが、兵隊は上からの命令には反くことは出来ず、北方に退った。

後日、聞かされたことだが反転開始後まもなく大本营から再び常德占領すべしとの命があったが、戦力が極端に衰えた今は、とても無理だということで沙汰止みになったそうである。

歩兵第百三十三連隊第九中隊の定員百五十名が四、五十名に減ってしまったほどの激戦であった。

沙市を経て漢口に入ったら在留邦人が日の丸で迎えてくれて嬉しかった。私は常德戦で右腕貫通銃創を受